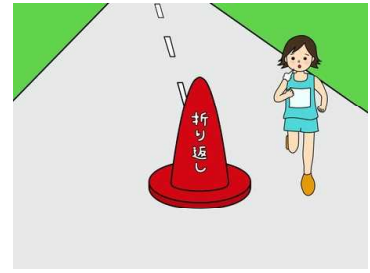


校長室より

暗唱だより
令和6年10月
第三吾孺小学校長
川中子 登志雄



令和6年度も、折り返し地点にやってきました。前期が11日に終了し、15日から後期がスタートします。前期には、校長室暗唱チャレンジは、五つの作品に挑戦してきました。ここまで全部に合格した人もたくさんいます。今年も、日本語の全作品に合格した人には3月にグランドスラム賞をおくりしますので、後期もがんばってください！

10月の暗唱課題は、中国の漢詩から「偶成（ぐうせい）」に挑戦してみましょう。

偶成

「少年老いやすく、学なり難し」で有名なこの漢詩は、中国の朱子学の祖である朱熹の作と言われています。（最近では、作者は別の人という説もあるそうです。）

「偶成」という言葉は、「たまたまできたもの」と

いうような意味で、「思いがけずできた詩」というタイトルがついているわけです。

出だしの「少年老い易く学成り難し（しょうねんおいやすくがくなりがたし）」とは、若いうちはまだ先があると思っただけで勉強に必死になれないけれど、すぐに年月が過ぎて年をとり、何も学べないで終わってしまう、だから若いうちから勉学に励まなければならない、という意味のことわざにもなっています。続く「一寸の光陰軽んずべからず」も同様にことわざとして用いられます。（ウィキペディアより）

3行目・4行目の「いまだ覚めず池塘春草の夢 階前の梧葉 已に秋声」は、普段見ない難しい漢字が使われていますが、意味は「池の堤の春草のなかで見た夢がまだ覚めないうちに、階段の前の青桐の葉には早くも秋の風が吹いている。」という感じで、時の過ぎるのが早いことを例えています。

日本では、昔は、人の身分はどの家庭に生まれるかで決まっていたましたが、学問を修めることで、国の重要な仕事に就くことができるようになるという考え方は、中国で古くから取り入れられていました。将来、立派な職に就くために、若いうちに必死で勉強をしたわけですが、なかなか学問を修めるのは大変なことでした。そんな中で、必死に勉強を頑張った人たちが、今の日本の基礎を作ってくれたのですね。

皆さんも、自分の興味のあることはもちろん、いろいろなことを自分で勉強するのを頑張りたいと思います。